



日本に来て58年になるバラ神父

年になり、金祝を祝つ

私が所属する下松カトリック教会は四月から新しい神父になつた。スペイン人のホセ・ミゲル・バラ神父で、先日八十一歳になられた。司祭になつて五十年になり、

そのバラ神父から「私が死んだ時に飾る遺影がない」と相談を受けた。神父の中でもとりわけ清貧に生活をしておられるので「写真屋さんで撮ると高いので、私のデジカメでもよいなら撮りましょう」と言うと「もちろんそれで十分です」と言われ、掲載の写真など十数枚を撮つた。

ある時、五十年の間、司祭の道を歩んだ感想を聞くと「それが実現できたのは祈るからです」と答えられた。司祭になつて五十年になり、

神の代理者としての神父に自分の犯した罪を告白することは苦しいと思うことが多い。しかし最後に「あなたの罪は赦(ゆる)されました。ご安心下さい」という言葉が素直に受け入れられる

ス・キリストに出会ったような喜びを感じる。

最初に神父のことを老宣教師と書いた。サビエルに始まりバラ神父に至るまで数多くの外国人宣教師たち、国、家族、友人から離れ、キリストの教えを伝えるために命をかけ、自分の生涯をかけた。ふと自分は彼らが伝えるキリストを本当に信じ、理解しているのかと自分を疑う。

しばらく死の準備をするバラ神父に動かされた心と行動について書いてみたい。

## 死の準備をする 「新たないのち」への希望①

今回から八月末にイタリア客船で行つた上

ついで書くつもりだつ

た。それが老宣教師の言葉により変える結果になる。それは、小さな出来事だったのだが

が、祭服を脱ぐと八十歳の老人になるというが正直な印象である。

バラ神父がまじめに、冷静に自分の死を考えられるのは、この世での死は誰も避けられないが、死んでも新

たな「いのち」に生きるという確信と希望を持つておられるからだろう。

最初に神父のことを老宣教師と書いた。サビエルに始まりバラ神父に至るまで数多くの外国人宣教師たち、国、家族、友人から離れ、キリストの教えを伝えるために命をかけ、自分の生涯をかけた。ふと自分は彼らが伝えるキリストを本当に信じ、理解しているのかと自分を疑う。



藤屋侃士  
(下松市幸ヶ丘)

317

たばかりである。バラ神父はイエズス会の会員。イエズス会をフランシスコ・サビエルらと創立したイグナチオ・ロヨラが書いた「靈操」を日本語に訳し、靈操にもとづいて默想指導をしておられる。私もその默想に参加したことがある。

ミサでの説教に感銘を受けることも多いが、祭服を脱ぐと八十歳の老人になるというが、心臓病、糖尿病、高血圧など病気のス

パー・マーケットの私の方がもっと真剣に自分の死について考えるべきだと強くつきつけられたのである。



神戸市立博物館にある  
サビエルの肖像画(重要文化財)

(重要文化財)